

タイトルワクチン接種予約に思う

安藤 晃二

四月二十六日、待ちに待った我が町の新型コロナワクチン予約開始日である。午前九時、準備万端、得意のインターネットの操作を整えて、号砲と共に予約作業に取り掛かる。イメージ通りの画面にるんるん気分で、必要事項を入力し、まだまだ余裕にみえる空き状況の中から、日にち、時間を選択して「予約」をポンと押せば楽勝の筈であった。

パツと変わった画面、「もう一度最初から入力やり直してください！」あれっ、間違えたかな。面倒くさいがもう一度、まだ空きがある、今度は思いを込めて、えいっ、と押した。再びあの画面、何回もやり続けることに、空きが狭まる。電話で訊いてやるるか、其れこそ最悪の行動、全く繋がらない。インターネットに戻り、狂人の如く「魔の画面」と戦い続ける。弾かれて七回目、五月のカレンダーが消え、6月に誘導された。6月4日を指示、「予約が完了しました」。開始からちょうど一時間、あがきにあがいた末、競争劇が終了、どんぶり辺でゴールインした。「あなた、予約できたのだからいいわよ」、落馬もせず、逆走もしなかった、妻の物言いは賢そうにも響くが、「ウイルスの速度に負けたらどうする」やはり憤懣やるかたない。

その後、この予約の問題には日本中が苦しみ、同様の問題を嘆く、強い不満の声が聞こえ始めた。大方は大コンサートのチケット予約のシステムから構築しているとか。政府曰く、「地方自治体の皆さんには極力混乱を招かないような体制を敷いていただくようお願いしています」とあなた任せの体。夫々の自治体がバラバラにシステムを作る、その全てが等しく「量を捌けず」パンクする。呆れた話である。この惨状に思う。新たなシステムやサインを導入を奨励させる前、必ず専門的にそのアカウンタピリティを吟味、齟齬を避けるのは企業では常識である。技術大国日本であるなら、こんな状況と緊急性に耐えうる、全国で使える強靱なソフトウェアを開発すべきだ。資金は政府負担で解決する。